

『シン・ゴジラ』はどのように観られたのか
—レビュー記事の計量的分析による検討—

林 延哉*

(2018年8月31日受理)

How Was the Film “Shin Godzilla” Received?: Study with
Quantitative Analysis of Review Articles

Nobuya HAYASHI*

(Accepted August 31, 2018)

1 目的

本論文では、映画『シン・ゴジラ』のレビュー記事に対して計量的分析を行うことで、『シン・ゴジラ』を観客はどのような視点から観たのか、何に観客が着目したのかについて検討する。

筆者は以前、当時の最新作であった『ゴジラファイナルウォーズ』（2004年公開）までのシリーズ全28作品¹⁾を、主に武力・軍隊の描かれ方の変遷という視点から概括したことがあるが（林（2008a）、林（2008b））、これはエンターテインメント作品は、その折々に人々が観たいと望むものを描き出しているという観点に立ってのことである。2016年に公開された『シン・ゴジラ』は、同年封切りの『君の名は。』と共に、この年の大ヒット作として大いに話題になった。日本製のシリーズ作品としては29作目になる²⁾。

高田（2010）は「『多くの視聴者を魅了する映像作品・文学作品』こそが現代の神話」であるとして、エンターテインメント作品の持つ価値観を物語構造分析の手法をもって明らかにすることを提起している。この手法は作品が持つ価値観を、作品を内面的に分析していくことで明らかにする手法である。先の筆者の論文は物語構造分析の手法を用いたものではなかったが、やはり作品の描いた内容を検討していくことでそこに描かれている価値観を明らかにしようというものであった。

しかしこうした方法を取る場合、その前提として、あるいは予備的資料として鑑賞者自身がその作品をどのように観たと感じているのか、についての知見は必要である。当然の事ながら、その知見が示すものは、例えば物語構造分析の手法をもって明らかにされるものと一致するとは限らない。作品の鑑賞者がその作品の面白さとして意識した部分が、その作品が内包する価値観であるとは限らないからだ。というよりもそこに齟齬がある場合、あるいは全く互いが関連し合わない場合にお

*茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）。

いてこそ、その「神話」が内包する価値観を明らかにする必要があるだろう。そのためにも、鑑賞者自身がその作品をどのように観たと語っているのかについての知見は必要なものである。

本論では作品を鑑賞者がどのように観たのか、何に着目したのか、言い換えるならば鑑賞者は自覚的には何を観、何に着目したと理解しているのかを明らかにすることを目的とし、その方法として、鑑賞者自身が執筆したレビュー記事を対象とし、それを計量的に分析することで検討しようというものである。対象作品として『シン・ゴジラ』を選定したが、これは『シン・ゴジラ』が近年の大ヒット映画のひとつであり、かつ筆者自身が以前よりゴジラシリーズに関心を持っていたためでもあるが、分析方法については、『シン・ゴジラ』に限らずあらゆる作品に適用出来るものを探りたいという関心のもとに検討をするものである。

2 分析対象と方法

分析対象のデータとして、映画情報サイトである映画.comで公開されている『シン・ゴジラ』のレビュー記事を用いた。

映画.comのレビュー記事は、同サイトで無料の会員登録をした利用者が自由に書き込めるようになっている。レビュー記事は「題名」と「本文」からなり、その他に「評価」「印象」「鑑賞日」「鑑賞方法」を記入することが出来るようになっている。

題名の入力欄には「作品を見た気分を一言」という但し書きが入力の際のガイドとして表示されるようになっている。本文は改行等自由に記入できるようになっているが、5000文字以内という制限が設けられている。評価は五つ星で表すようになっているが、0.5から5まで0.5刻みで評価出来るようになっている。また、評価しないことも出来る。

2017年6月28日現在登録されていたレビュー記事を取得した。記事の本数は1300件であったが、そのうちの10件には評価の値が記入されていなかった。分析に際して記事の分類に評価値を使用したため、この10件については分析対象から除外した。

データの中に鑑賞日が「2016年1月31日」と「2017年7月24日」というものがあつた。『シン・ゴジラ』の封切りは2016年7月29日であるが、鑑賞日については記事執筆者が任意に設定出来るので、何らかの入力ミスと考えられる。今回の分析では鑑賞日は分析対象の変数としていないので、これらふたつのレビュー記事についても分析対象として含んだ。

『シン・ゴジラ』のDVD・ブルーレイディスクの発売は2017年3月22日であったが、記事執筆者の半数以上は映画館での鑑賞に基づいたレビューであった（表1）。

また、投稿は、858件がiPhoneアプリ又はAndroidアプリから投稿されていて、その他にスマートフォンからの投稿が148件となっている。約76.8%がスマートフォン或いはタブレット端末から入力されており、PCの使用は約22.7%であった。残りの0.5%はフィーチャーフォンからの投稿である。

分析にはRを用いた（バージョンは3.5.0）。形態素解析の処理にはmecab並びにRMeCabパッケージ（バージョン1.0）を使用した。mecabのバージョンは0.966、ipadic辞書を利用したものを使用した。また、対応分析に際しては、R用のFactoMineRパッケージ（バージョン1.41）を用いた。

表1 鑑賞方法の内訳

鑑賞方法	件数
映画館	775
DVD/BD	24
DVD/BD, 映画館	3
VOD *	3
VOD, 映画館	2
映画館, 試写会	2
未記入	501

* Video On Demand の略

分析に先立ち、データの中に含まれる半角文字の全角文字への変換を行った。各レビュー記事本文内の改行は削除した。また、レビューの題名は、本文とは別の入力欄に入力するようになっているが、先述の通り「作品を見た気分を一言」という言葉が入力欄に添えられており、作品に対する鑑賞後の印象、感想を直截に記述しやすいものになっている。その意味では本文とは別に分析を行う可能性も示唆されるが、今回は、題名から本文は継続的に記述される、或いは展開されるものとして、題名を本文と区別せずに、本文冒頭に句点で区切られた一文として付け加えた。

mecab は ipadic 辞書を使用した。全データを対象とした事前の予備的な形態素解析を行った結果から、以下の9つの単語をユーザー辞書に追加で登録した。

まず、『シン・ゴジラ』の総監督の姓である「庵野」はしばしば登場するが「庵」「野」と分離して数えられるためこれを一単語とした。庵野は人気アニメである「エヴァンゲリオン」シリーズの演出・監督を行っているためこの作品への言及も多いが「エヴァンゲリオン」「エヴァンゲリラン」「エヴァ」と多様な形で言及されるため、この3語についてもユーザー辞書に登録し、原形を「エヴァンゲリオン」とした。また、アニメ『風の谷のナウシカ』に登場する「巨神兵」もしばしば登場する語であったが³⁾、「巨神」と「兵」の二語になるため「巨神兵」として辞書に登録した。作品タイトルである「シン・ゴジラ」も「シン」「ゴジラ」と判断されるため、一語とし、また「シンゴジラ」という表記をする執筆者も居たため「シンゴジラ」として登録し、原形を「シン・ゴジラ」とした。他に、主要登場人物を演じた石原さとみへの言及が頻出するのだが、「石原」と「さとみ」とに分かれて判断されるため「石原さとみ」を一語として登録した。主演を演じた長谷川博己も同様の扱いとした。他の出演者については登場する頻度が多くなかったため、ユーザー辞書への登録は行っていない。

3 結果及び考察

3.1 頻出語について

分析対象とした全レビュー記事を mecab を用いて形態素解析を行った結果、総語数（延べ語数）は 238949 語、異なり語数は 28923 語となった（以降形態素ではなく単語、或いは語と称する。形態素を単語と称することについては小林（2017）に依る）。尚、異なり語数は表層形ではなく原形で計数している。

今回はレビュー記事の内容について検討するため、内容語として名詞・形容詞・動詞に着目し、これらのみを抽出したところ、名詞は総語数 76712 語・異なり語数 7730 語、形容詞は総語数 5945 語・異なり語数 321 語、動詞は総語数 28746 語・異なり語数 1863 語となった。

動詞は、1863 種類の語が見出されたが、出現頻度で見ると頻度の多いものから 14 単語（「する」「いる」「ある」「思う」「れる」「なる」「見る」「てる」「観る」「感じる」「言う」「せる」「られる」「くる」）で動詞全体の総語数の約 52% を占めていた（総語数 28746 語に対して、14 単語の出現頻度の合計は 14819 回）。これらの単語は映画のレビュー記事に限らず一般的に出現し易い単語である。ある程度作品に対する評価的なものを表すと考えられる「楽しめる」が出現頻度で 26 位に現れるが、そこに至るまでも「できる」「出る」「しまう」等一般的な動作を表す単語が続く。そのため、今回の分析では動詞は除き、名詞と形容詞のみを対象とすることとした。

出現頻度 100 回以上の名詞と形容詞 95 語を表 2 に示した。但し、「の」「こと」のようなその単語自体では意味を取りにくい非自立語や接尾語、「1」「2」と言ったその単語単体では何の数値を表しているのか解釈できない数詞については除いている。その結果レビュー全体としては、総語数は 65637 語、異なり語数は 7764 語となったが、7764 語中の 95 語（約 1.2%）で、総語数 65637 語の約 38.8% である 25451 語となった。

映画『シン・ゴジラ』に関するレビュー記事であるので、「ゴジラ」「映画」と言った語が頻出語の上位に挙がるのは順当な事であろう。ゴジラシリーズは日本を代表する特撮怪獣映画であり、1954 年の第 1 作より続くシリーズであるが、日本で作られた作品としては 2004 年『ゴジラファイナルウォーズ』以来 12 年振りであり、一方、本作の 2 年前の 2014 年 7 月にはアメリカ映画の『Godzilla』が日本国内でも公開され話題になっている。「ハリウッド」「アメリカ」「邦画」と言った単語が挙がるのはこのこととの関連も考えられる。「日本」についても同様の文脈が考えられるが、一方で「日本人」という語も頻出しており、異なる文脈も伺われる。

「シン・ゴジラ」は映画のタイトルであり、言及は当然多くなると思われるが、「ゴジラ」と較べるとその出現頻度は低い。『シン・ゴジラ』があくまでも「ゴジラシリーズ」の一環として語られていることが想定される。

「エヴァンゲリオン」も頻出語上位に位置しているが、これは 1995 年にテレビ東京系で第 1 作である『新世紀エヴァンゲリオン』が放映され、今もなお映画作品が製作され続けている人気アニメ・エヴァンゲリオンシリーズの演出・監督である庵野秀明が、本作の総監督と脚本を担当していることと関連していると考えられる。

表2 出現頻度 100 回以上の単語（名詞・形容詞のみ、数詞・非自立語・記号を除く）

抽出語	出現数	抽出語	発言数	抽出語	発言数
ゴジラ	3565	破壊	207	問題	134
映画	1802	東京	204	素晴らしい	132
日本	936	ハリウッド	197	鑑賞	131
ない	767	期待	195	あと	130
作品	673	災害	187	今回	130
エヴァンゲリオン	531	C G	181	前	128
良い	507	会議	181	すごい	127
面白い	501	日本人	180	世界	125
庵野	491	作戦	174	邦画	125
人	479	評価	172	ドラマ	124
シーン	475	笑	167	国	124
これ	470	自分	166	アメリカ	121
それ	454	現実	164	ストーリー	121
監督	452	音楽	163	恐怖	119
怪獣	434	迫力	163	セリフ	118
今	326	核	158	姿	118
私	296	攻撃	154	本	117
人間	279	ファン	150	現代	116
感じ	245	登場	150	ここ	115
石原さとみ	245	意味	147	話	114
シン・ゴジラ	244	映像	147	対応	112
リアル	243	最高	147	形態	108
政府	243	悪い	145	初代	107
何	237	子供	143	リアリティ	105
多い	235	生物	141	存在	105
いい	232	演出	140	凄い	104
政治	229	強い	140	怖い	104
無い	221	進化	140	大人	103
自衛隊	219	そこ	138	表現	103
特撮	219	よい	138	演技	102
最後	216	個人	135	展開	100
好き	214	最初	135		

「良い」「面白い」と言った作品に対する評価を表すと考えられる語が上位に挙がるのは順当なことと考えられる。但し、これは原形による集計なので、作品に対する肯定的な評価を意味しているわけではない。

出演した俳優陣の中では、「石原さとみ」の名だけが、出現頻度 100 位以上に登場している。鑑賞者の印象に残る演技であったことが推察される。

「政府」「政治」「自衛隊」「破壊」「東京」「災害」「会議」等の単語が上位に出現するのは、この作品が、ゴジラに襲われた日本・東京と、その対策に奔走する日本政府の官僚の姿を描いたものであるためであろう。

次に共起ネットワークによって出現頻度の高い単語の意味を検討する。対象を名詞に限定しつつ、

表3 出現頻度 30 回以上の 2-gram（名詞のみ）

2-gram	頻度	2-gram	頻度	2-gram	頻度
ゴジラ-映画	226	日本-政府	56	こと-ゴジラ	36
庵野-監督	203	ゴジラ-作品	52	の-それ	36
怪獣-映画	190	ゴジラ-ファン	51	人間-ドラマ	36
の-ゴジラ	121	. - 1	50	原発-事故	36
個人-的	115	4-年	50	映画-中	36
政治-家	115	の-の	48	現代-日本	35
本-作	115	1-9	48	線-爆弾	35
日本-映画	107	の-映画	46	作-目	34
日本-ゴジラ	95	3-.	46	情報-量	34
映画-ゴジラ	94	ゴジラ-シリーズ	44	の-日本	33
映画-館	93	何-度	44	劇-中	33
ゴジラ-の	86	回-目	44	現実-的	33
2-0	85	今-ゴジラ	43	石原さとみ-さん	33
1-1	83	今回-ゴジラ	43	何-の	32
ハリウッド-版	81	2-回	43	実写-版	32
庵野-さん	79	オリ-作戦	42	2-時間	32
庵野-秀明	78	今-作	42	9-5	32
ゴジラ-ゴジラ	77	5-4	42	ん-ゴジラ	31
映画-の	75	ゴジラ-こと	41	凝固-剤	31
初代-ゴジラ	71	ヤシ-オリ	41	想定-外	31
在来-線	66	一-人	41	昔-ゴジラ	31
版-ゴジラ	65	一-回	39	自然-災害	31
登場-人物	64	作-ゴジラ	39	4-D X	31
1-0	64	米-軍	39	それ-ゴジラ	30
今-日本	63	こと-の	38	作品-ゴジラ	30
ゴジラ-日本	62	人-たち	38	核-攻撃	30
0-0	59	会議-シーン	38	1-作	30
これ-ゴジラ	57	絶望-感	38		
0-1	57	ゴジラ-進化	37		

隣接して共起する単語の組み合わせを求めたものを、表3に、出現頻度 30 回以上の条件で示した。

これを元に共起ネットワークとしてグラフ化したものが、図1である。

「ゴジラ」を中心に、「今-作」「今-ゴジラ」「初代-ゴジラ」「ゴジラ-シリーズ」「ゴジラ-作品」「日本-ゴジラ」「ハリウッド-版-ゴジラ」と言った単語が関連していることが見て取れる。今回の『シン・ゴジラ』がこれまでのゴジラシリーズ、アメリカ版のゴジラとの対比の中で語られていることが分かる。「1-9-5-4-年」のつながりも初代ゴジラの公開年である 1954 年を指していると考えられる。「ヤシ-オリ-作戦」「在来-線-爆弾」は映画の中で用いられるゴジラ対策の作戦名で、これらの作戦が鑑賞者に強い印象を与えたと思われる。「政治-家」「日本-政府」「今-日本」は、今作がゴジラに対する日本政府・官僚・政治家の対応を中心に描いていることで言及頻度が高くなっていると考えられる。「原発-事故」「現代-日本」「自然-災害」等現実の災害と関連付けて映画を論じている可能性をうかがわせる。総監督である庵野秀明への言及も多い。「個人-的」については、

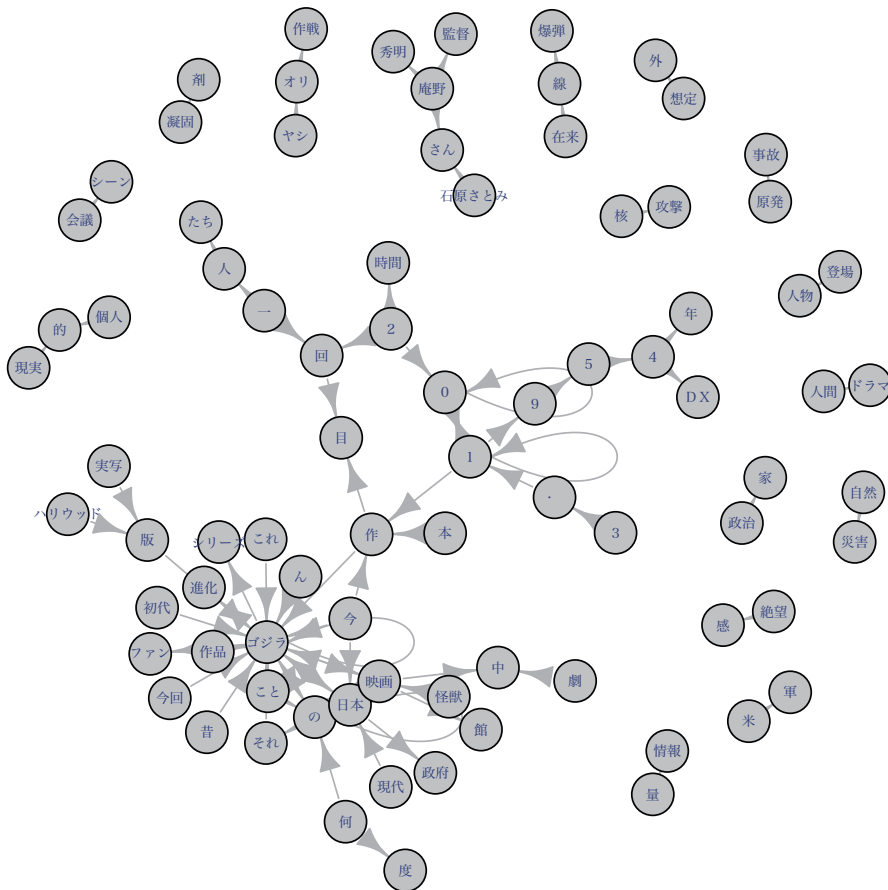


図1 名詞の共起ネットワーク

その具体的な内容をレビュー本文に戻って確認したところ、「個人的に」「個人的には」「個人的な」という使われ方が主で、自分の見解、意見が、自分個人のものであることを言うために用いられていた。映画レビューではあっても、プロの評論家によるものではなく、一般の鑑賞者によるものであり、また、ネット上に公開され不特定多数の読者の目に触れるものであることから、「これはあくまでも自分の個人的な見解である」ということを強調しようとしていることが見て取れる。

ここまでの頻出語の検討をまとめると、まず分かるのは、映画『シン・ゴジラ』がゴジラシリーズのひとつとして語られているということである。ゴジラは日本のみならず米国でも製作されており、それも含めた作品群の中の一作品として観られているということである。

また、『シン・ゴジラ』の総監督は庵野秀明であり、庵野は、1970年代の『宇宙戦艦ヤマト』、1980年代の『機動戦士ガンダム』と並んで後のアニメに多大な影響を与えたと評される⁴⁾『新世紀エヴァンゲリオン』の監督である。庵野の代表作である「エヴァンゲリオン」との対比においても『シン・ゴジラ』は語られている。

表4 評価値別レビュー記事数

評価値	レビュー記事数	全記事数に対する%
0.5	47	3.6
1.0	51	3.9
1.5	19	1.5
2.0	61	4.7
2.5	34	2.6
3.0	105	8.1
3.5	118	9.1
4.0	282	21.7
4.5	228	17.5
5.0	355	27.3

映画の内容に関連しては、ゴジラという「災害」に見舞われた東京・日本で、日本政府の官僚・政治家がこの事態にどのように対処していくのか、と言うのが『シン・ゴジラ』のメインのストーリーラインであるが、レビューの執筆者も又、その部分に強く訴求したことが分かる。又、その中で用いられた対ゴジラ作戦である「在来線爆弾」「ヤシオリ作戦」が高い関心を買っている。

登場人物に関しては、多くの出演者の中で、石原さとみの演技が強い印象を残したことが分かる。

3.2 評価値別レビュー記事の検討

先述した通り、今回分析対象としたレビュー記事には、10段階の評価値が付いている。評価値は0.5から5まで0.5刻みで、数値の大きい方が高い評価を示している。

今回のデータについて、評価値別のレビュー記事本数の内訳は表4となっている。最頻値は5.0で全体の27.3%，次いで4.0で全体の21.7%，評価4.0以上で全体の66.5%を占めている。全般的に高い評価を得ているように見える。但し、Yahoo! 映画のレビューデータ1183970件を分析した吉永・水谷（2015）では、レビュー記事全体の31.5%を総合評価5（Yahoo! 映画の場合、評価は1から5までの1刻みの5段階評価）を占め、4が27.8%，両者を合わせて59.3%を占めるという結果が出ている。レビュー記事の執筆者は比較的高く評価している作品についてレビューを書くというのが一般的傾向であることが示唆されるもので、『シン・ゴジラ』のレビュー記事も同様の傾向を示していると理解した方がいだろう。

前節では分析対象としたレビュー記事全体を込みにした頻出語に基づく検討を行ったが、対象となる映画の評価に応じて、レビューの論点が異なっていることが考えられる。そこでここでは、評価値毎にレビュー記事をまとめた10個の文書を作成した上で、文書ターム行列を作成し、これに対応分析を適用することで、その内容を検討した。

文書ターム行列作成に当たって単語については名詞・形容詞に限定し、その内の数詞・非自立語・接尾語については除外した。

また単語の出現頻度は全文書を通して合計100以上の単語のみを対象とした。その結果95個の単語が抽出された。この95語の文書を込みにした出現頻度は25379語で、総語数238949語の

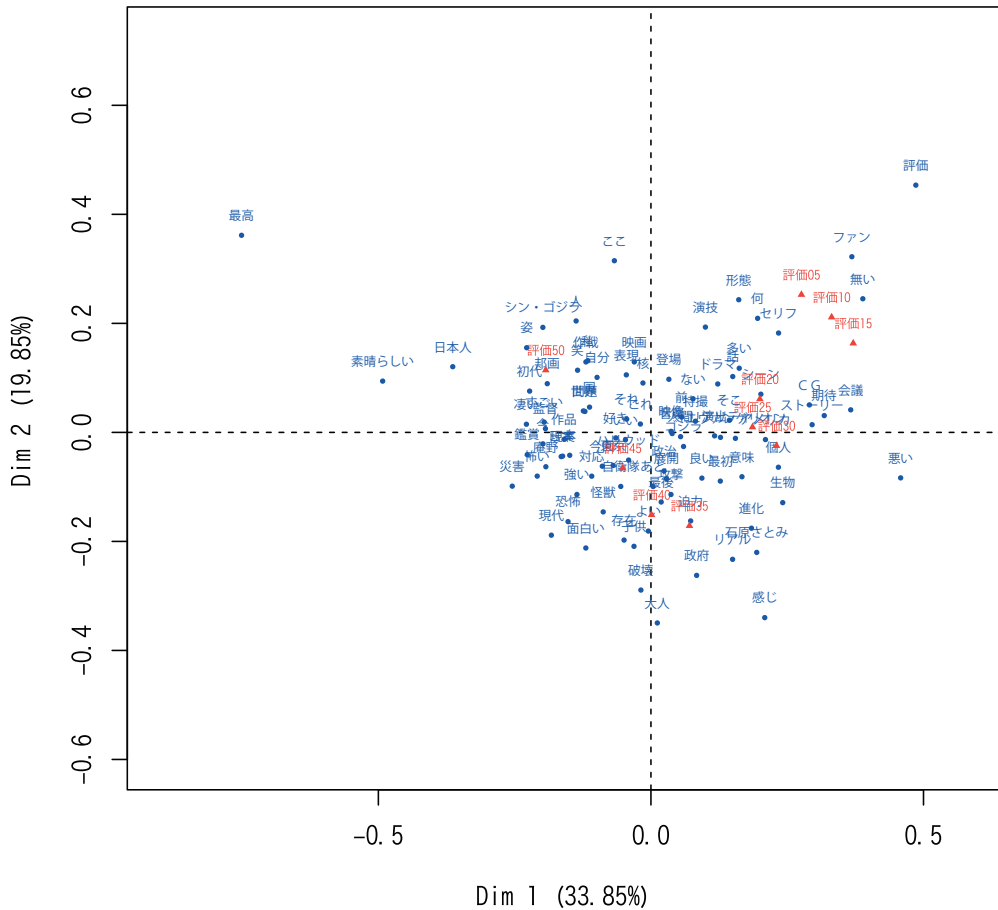


図2 文書ターム行列の対応分析の結果 (Dim 1 Dim 2)

10.6%に当たる。数詞等を除いた名詞・形容詞のみの総語数は 65637 語で 95 語でこの 38.7%に当たる。

この文書ターム行列で対応分析を行った結果の第1軸と第2軸でのバイプロットが図2である。図中では、評価値 0.5 のレビュー記事は「評価 05」、1.0 のレビュー記事は「評価 10」、以下、評価値 4.5 は「評価 45」、評価値 5.0 は「評価 50」としてプロットされている（以下の記述でも、プロットに使用されている呼称を用いる）。第1軸は固有値 0.027、第2軸は固有値 0.016 で、1軸は全慣性の約 33.9%、2軸は 19.9%、2軸までで全慣性の約 53.8%を表している。

まず第1軸に着目すると、評価の高低に沿った軸と理解できる。1軸に対する単語の寄与度においては、評価値では「評価 50」「評価 10」「評価 30」「評価 05」「評価 20」が高く、評価の高低が軸に寄与していることが分かる。単語では「最高」「評価」「無い」「素晴らしい」「悪い」「日本」「会議」「日本人」等の寄与度が相対的に高いが、「評価 50」の側に「最高」「素晴らしい」「日本」「日本人」が、

「評価 10」「評価 30」「評価 05」「評価 20」の側に「評価」「無い」「悪い」「会議」等が位置している。

第 2 軸では、寄与度の相対的に高い単語としては「評価」「映画」「感じ」「面白い」「人」「最高」「破壊」「政府」「ファン」「無い」「大人」等が挙げられるが、「評価」「映画」「人」「最高」「ファン」「無い」が図 2 では上方に、「感じ」「破壊」「大人」は下方に位置している。評価値では寄与度の高いものとしては、下方には「評価 45」「評価 35」、上方には「評価 50」「評価 05」が位置している。ここではこの軸を、主に単語の布置から、相対的に作品全体に対する言及か、映画のストーリー上の具体的な部分や内容に関するものか、に関する軸と解しておく。

図 2 からは、評価 05・評価 10・評価 15 のまとまり、評価 20・評価 25・評価 30 のまとまり、評価 35・評価 40・評価 45 のまとまり、評価 50 と 4 つの群を想定する事が出来る。評価 05・評価 10・評価 15 を低評価群、評価 50 を高評価群、評価 20・25・30 は中程度の中の低い評価群として中低評価群、評価 35・40・45 のまとまりを中高評価群と呼ぶこととする。

低評価群の周辺には「ファン」「無い」「評価」等が位置しているが、作品の具体的な部分への言及が少ないことが示されていると考えられる。中低評価群周辺には「シーン」「エヴァンゲリオン」「アメリカ」「リアリティ」「演出」「CG」「ストーリー」等が位置している。エヴァンゲリオンや米国版ゴジラ等に言及しつつ演出、ストーリー、CG 等について論じていると考えられる。中高評価群周辺には「迫力」「政府」「リアル」「最後」「攻撃」「政治」「展開」「自衛隊」「東京」「ハリウッド」等が位置しており、相対的に作品ストーリーの内容に言及する傾向が窺われる。高評価群の周辺には、「初代」「邦画」「姿」「シン・ゴジラ」等が位置している。低評価群、高評価群のレビューでは、「作品」自体を言及対象としてのその良し悪しを論じるのに対して、中程度の評価を与えているレビューは映画の演出、CG、同監督の他作品や米国版との比較や、ストーリー上の具体的な内容、登場人物等について論じる傾向があることが示唆される。特に中高評価群のレビューは作品内容に具体的に触れつつレビューを行っていると考えられる。

4 まとめと展望

本論文では、映画『シン・ゴジラ』のレビュー記事にテキストマイニングの手法を用いて計量的な分析を行い、レビュー記事が『シン・ゴジラ』を語る際にどのような部分に着目しているかの検討を行った。分析に使用したレビュー記事全体を通しての頻出語の分析からは、『シン・ゴジラ』が長く製作され続けてきているゴジラ作品群のひとつとして観られていることが示唆された。また、同じ監督の作品であるアニメ・エヴァンゲリオンシリーズとも対比されつつ観られたことが示された。映画の内容については、主たるストーリーラインに沿って観客も映画を評価しているが、作品の中で用いられた「作戦」が観客の関心を引いたことが示唆された。

レビューアーが記事と同時に『シン・ゴジラ』に与えた 10 段階の評価値を用いて、評価値を変数とした文書ターム行列の対応分析からは、高い評価値の記事、低い評価値の記事に比較して中位の評価を与えている記事はより具体的な部分を挙げつつ論じているが、中程度の評価の中でも低い評価を与えた記事は作品の演出やエヴァンゲリオンとの比較等について触れる傾向が強く、中程度の評価の中でも高い評価を与えた記事は作品の内容について触れている傾向が強いことが示唆された。作品を論じるに当たって、作品総体をシリーズや関連作品、邦画・洋画の枠組みの中に位置づ

けて論じる論じ方と、作品の具体的な内容を挙げつつ論じる論じ方があることが見出された。特に、低評価・高評価の群に比較して、3.5, 4.0, 4.5 という評価を与えているレビュー記事は、より作品のストーリー上の具体的な内容に言及している可能性が示唆されたが、この評価群のレビュー記事のより詳細な分析は、記事執筆者が『シン・ゴジラ』という作品のどのような部分に対して、どのような肯定的或いは否定的な意味付けを行っているかを見いだせると思われる。今回はその検討に手を付けられなかったが、今後の課題としたい。

注

- 1) もともと『ゴジラ』はシリーズ物として企画されたものではないが、第1作以降、時に間を置きつつもゴジラを主要登場人物として据えた映画は作られ続けている。ここではそれらの作品をまとめて呼ぶ時にはゴジラシリーズと呼ぶことにする。
- 2) この間、2014年に米国映画の『Godzilla』（日本語タイトルは『GODZILLA ゴジラ』）が公開されている。
- 3) 庵野は2012年の夏に東京都現代美術館で開催された「特撮博物館——ミニチュアで見ると昭和平成の技」の「館長」を務めたが、その中で『シン・ゴジラ』の監督・特技監督である樋口正嗣による映画『巨神兵東京に現わる』が上映されている）
- 4) Wikipedia「新世紀エヴァンゲリオン」<https://ja.wikipedia.org/wiki/新世紀エヴァンゲリオン>、(2018年8月14日確認)

引用文献

- 林 延哉. 2008a. 「ゴジラ：忘却の軌跡（その1）昭和シリーズ」『茨城大学教育学部紀要・人文・社会科学・芸術』, 57, 29–48.
- 林 延哉. 2008b. 「ゴジラ：忘却の軌跡（その2）平成／新世紀シリーズ」『茨城大学教育学部紀要・人文・社会科学・芸術』, 57, 49–69.
- 小林雄一郎. 2017. 『Rによるやさしいテキストマイニング』（オーム社）.
- 高田明典. 2010. 『物語構造分析の理論と技法：CM・アニメ・コミック分析を例として』（大学教育出版）.
- 吉長明宏・水谷直樹. 2015. 「統計的手法を用いた映画レビューサイトの分析と考察：Yahoo! 映画の全レビューデータを対象として（ライフインテリジェンスとオフィス情報システム）」『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report: 信学技報』, 114, 500, pp. 145–150.